

リアル・ブランドの原点

彼はモテたいがために九州の片田舎でバンドを結成した。
ポジションはボーカル。ギターは弾けない。
外見は「ダメかな?」と「ダメだな」の中間。
肝心の歌声もほとんど鼻歌で、とても聞く人を酔わせる美声とは言えなかった。

ただ彼には歌いたいことがたくさんあった。
メンバーは彼がマイクを持つことに賛成した。
しかし、「歌のテーマをたくさん持っている」ことが決め手になったわけではない。
彼は歌いたいことを聞き手に届けるために必要な、胸に打つ言葉を紡ぐのが天才的にうまかった。
地元で有名になった彼のバンドに、東京の音楽事務所から声がかかるのにそう時間はかからなかった。
期待に夢を膨らませ、彼らは夜汽車で故郷を後にした。
東京で華々しくメジャーデビューを飾った彼らを待ち受けていたのは、まさしく地獄の日々。
出す曲出す曲、まったく売れない。
大衆受けを狙い、散った恋の恨み節を流行の優しい言葉に置き換え、甘いメロディに乗せて歌った。
しかし、彼らの歌は誰の耳にも届かなかった。
彼らの曲は時代に乗り切れなかった。
業界からは「泥付き歌」と一蹴された。
彼は思った。

「どれだけ必死になっても、叶わないものって、あるんだな」
「努力」は報われて初めて「努力」という称号を与えられるものなのだ。

報われなかった「努力」は「挫折」という不名誉な烙印を押され、その人間の心の底に、澱のようにたまってゆく。彼が歌い手として最後のプライドも見いだせなくなった頃、とある音楽フェスティバルに彼のバンドは出演した。
これをラストチャンスと、彼らは腹をくくった。
ラストチャンスと位置づけたのはほかでもない。
フェスティバルの開催地は彼らの地元だったのだ。
彼らは声が枯れるまで歌い、腕がへし折れるくらい弦をかき鳴らした。

しかし、聴衆は彼のバンドの曲が終わっていないのにもかかわらず、別の同世代バンドの名前をコールし始める。
彼は悔し涙をぐっと堪え、何とか1曲歌い切ると、バンドのメンバーにラストの曲の変更を指示した。

メンバーは驚いた。
彼が指定したその曲は、前夜によく歌詞が完成しばかりの新曲だったのだ。
しかもこれぞ泥付き歌と言いたくなるほど、今の音楽シーンに逆行しているような実に野暮ったい作品だった。彼は、志半ばで潰えた我が夢を思い、故郷を離れる自分を何も言わずに見送ってくれた母を思い、次のバンドを心待ちにする聴衆を呪うかのように、ゆっくりと「極め付きの泥付き唄」を歌い始めた。

もう誰にも媚びるものか。
これが今の自分なのだ。

悔しさと自分に対する失望は彼の体を満遍なく巡り、やがてそれは雫となって彼の目に溢れた。
無様に垂れる鼻水を拭いもせず、汗で顔に張り付く長い髪もそのままに、彼は歌った。
その様子はローカルテレビ局によって生中継されていた。
翌日、地元ラジオ局は朝から前代未聞のリクエスト攻撃にあっていた。
オペレーターは丸一日、何度も何度も、受話器の向こうからこの言葉を聞くことになったのだ。
「こら鉄矢！ なんばしよっとか！ の歌、お願いします」